

# 渋民村より

石川啄木

青空文庫



杜陵とりやうを北へ僅かに五里のこの里、人は一日の間に往復致し候へど、春の歩みは年々一週が程を要し候。御地は早や南の枝に大や和心まとこころほし綻ろび初め候ふの由、満城桜あううん雲の日も近かるべくと羨やみ上げ候。こゝは梅ばい桜あうの蕾い未だ我瞳まよりも小さく候へど、さすがに春風のをぐるま小車道を忘れず廻り来て、春告鳥うぐひす、雲雀ひばりなどの讚歌、野に山に流れ、微風にうるほふ小堇の紫も路の辺に萌え出で候。今宵は芝蘭しらんの鉢の香りゆかしき窓、茶煙一室を罩こめ、沸る湯の音暢のびやかに、門田の蛙さへ歌声かせいを添へて、日頃無興にけをされたる

胸も物となく安らぎ候まゝ、思ひ寄りたる二つ三つ、※々《じじ》  
 たる燈火の影に覚おぼつか束なき筆の歩みに認め上げ候。

近事戦局の事、一言にして之を云へば、吾等国民の大慶この上  
 の事や候ふべき。臥ぐわしん薪十年の後、甚はなはだ高価なる同胞の資財と生  
 血とを投じて贏かち得たる光栄の戦信に接しては、誰か満腔の誠意  
 を以て歓呼の声を揚げざらむ。吾人如何に寂寥の児たりと雖いへども、  
また亦野翁酒しゆそん樽の歌に和して、愛国の赤子たるに躊躇する者に無ごぎ  
くさうらふ御座候。

戦勝の光栄は今や燎れうぜん然たる事実として同胞の眼前に巨虹の如  
 く横はれり。此際に於て、因いんじゆんこそく循姑息の術中に民衆を愚弄した  
 る過去の罪過を以て当局に責むるが如きは、吾人の遂に忍びざる

所、たゞ如何にして勝ちたる後の甲の緒を締めむとするかの覚悟  
 に至りては、心ある者宜しく挺身肉迫して叱咤督励する所な  
 かるべからず候。近者北米オークランド湖畔の一友遙かに書を  
 寄せて曰く、飛電頻々として戦勝を伝ふるや、日本人の肩幅日  
 益日益広きを覚え候ふと。嗚呼人よ、東海君子国の世界に誇負  
 する所以の者は、一に鮮血を怒濤に洗ひ、死屍を戦雲原頭に曝し  
 て、汚塵濛々の中に功を奏する戦術の巧妙によるか。充実なき  
 誇負は由来文化の公敵、真人の蛇蝎視する所に候。好んで酒盃に  
 走り、祭典に狂する我邦人は或は歴史的因襲として、アルコール  
 的お祭的の国民性格を作り出だしたるに候らはざるか。斯の千載  
 一遇の好機会に当り、同胞にして若し悠久の光榮を計らず、徒ら

に一時の旗鼓きこの勝利と浮薄なる外人の称讚せんに幻惑するが如き挙に出でしめば、吾人ごじんは乃ち伯叔と共に余生を山谷さんこくの蕨草けつさうに托し候はむかな。早熱早冷の大に誠いましむべきは寧ろむし戦呼に勇む今の時に非ずして、却りてかへ戦後国民の覚悟の上にあるべくと存候。万ばん邦環視うくわんしの中に一大急飛躍を演じたる吾国は、向後かうご如何なる態度を以てか彼等の注目を迎へむとする。洋涛万里やうたうばんりを破るの大艦と雖いへども、停滞動く事なくむば汚鏽腐蝕をしうふしよくを免かれ難く、進路一度梶を誤らば遂に岩角がんかくの水泡に帰せむのみ。況んやいは形色徒らに大にして設備完たからざる吾現時の状態に於てをや。

惟おもふに、少しく夫それに通曉する者は、文化の源泉が政治的地盤に湧出する者に非ざるの事実と共に、良好なる政治的動力の文化の進程に及ぼす助長的効果の事実をも承認せざる能はず候。而しかして斯かくの如き良好なる政治的動力とは、常に能く国民の思潮を先覺し誘導し、若しくは、少なくともそれと併行して、文化の充實を内に収め、万全の勢威を外に布くの実力を有し、以て自由と光榮の平和を作成する者に有これあり之、申す迄もなく之は、諸あらゆる有創造的事業と等しく、能く国民の理想を体達して、一路信念の動く所、個人の権威、心霊の命令を神の如く尊重し、直往邁進がう毫も撓むなき政治的天才によつて経緯せらるゝ所に御座候。吾人が今世界に発

揚したる戦勝の光栄を更に永遠の性質に転じて、古代希臘ギリシヤの尊  
 嚴なる光輝を我が国土に復活せしめ、吾人の思想、文学、美術、  
 学芸、制度、風氣すべの凡てをして其存在の意義を世界文化史上に求  
 めむが為めに、之が助長的動力として要する所の政治家は固より  
 内隱忍外倨きよがうしか傲然も事に当りて甚だ小胆なる太郎内閣に非ず、果  
 たかの伊藤や大隈や松方や山県に非ずして、実に時勢を洞觀する  
 一・大・理・想・的・天・才・な・ら・ぎ・る・可・から・ず・候。一例をあぐれば、其名独逸ドイッ  
 建国の歴史を統すぶる巨人ビスマルクの如きに候ふ可べく、普仏戦争  
 に際して、非常の声誉と、莫大の償金と、アルサス、ローレンス  
 と、烈火の如き仏人の怨恨とを担になふて、伯林城下ベルリンに雷霆らいていの凱が  
 歌いかを揚げたる新独逸ユングドイチュエを導きて、敗れたる国の文明果して劣れ



るか、勝たる国の文明果して優れるかと叫べるニイチエの大警告に恥ぢざる底の発達を今日に残し得たる彼の偉業は、彼を思ふ毎に思はず吾人をして讚嘆せしむる所に候はずや。嗚呼<sup>あ</sup>今や我が新日本は、時を変へ、所を変へ、人種を変へて、東洋の、否世界の、一大普仏戦争に臨み、遠からずして独逸以上の光榮と、猜疑と、怨恨と、報酬とを千代田城下に担ひ来らむとす。而<sup>しか</sup>も吾人はこの難関に立たしむべき一人のピ公を有し候ふや否や。あらず、彼を生み出したる独逸の国民的自覺と、民族的理想と自由の精氣と堅忍進取の覺悟の萌芽を四千余万の頭腦より擗<sup>さくしゆつ</sup>出し得べきや否や。勝敗真に時の運とせば、吾人は、トルストイを有し、ゴルキイを有し、アレキセーフを有し、ウキツテを有する戦敗国の文明

に対して何等しり後へに 瞠だうじやく 若やくたるの点なきや否や。果はた又、我が  
 父祖の国をして屈辱の平和より脱せむが為めに再び正義の名を借  
 りて干戈かんくわを動かさしむるの時に立ち至らざるや否や。書して茲ここ  
 に至り吾人は実に 悵ちやうぜん 然ぜんとして転うたた大息を禁ずる能はざる者に  
 候。嗚呼あゝ今の時、今の社会に於て、大器を呼び天才を求むるの愚  
 は、蓋けだし街頭の砂塵より 緑エメラルド 玉たまを拾はむとするよりも甚しき事  
 と存候。吾人は我が国民意識の最高調の中に、全一の調和に基け  
 る文化の根本的発達の希望と、愛と意志の人生に於ける意義を拡  
 充したる民族的理想の、一日も早く鬱うっほつ勃ぼつとして現はれ来らむ事  
 を祈るの外に、殆ほとんど為す所を知らざる者に御座候。

(四月廿五日夜)

四月二十六日午後一時。

夜来の春雨猶止まずして一山風静かに、窓前の柳りうしやう松すみしよ翠

色く更に新たなるを覚え、空廊に響く滴水の音、濡羽をふるふ鶯

の声に和して、艶だちたる幽奥の姿誠に心地よく候。この雨収ま

らば、杜陵は万色一時にひら発ひらく黄金幻境にぞんぜられさふらふ変ひらず可くと被ぞんぜられさふらふ存ひら候。

今日は十時頃に朝餐を了へて、（小生の経験によれば朝寝を嫌

ひな人に、話せる男は少なき者に御座候呵々）二時間許り愛国詩

人キヨルネルが事をほんどく繙ほんどく読して痛くも心を躍らせ申候。張り詰め

たる胸の動悸今猶静め兼ね候。抑々人類の「愛」は、万有の生  
そもそも  
 命は同一なりてふ根本思想の直覚的意識にして、全能なる神威の  
もつと  
 尤も円満なる表現とも申す可く、人生の諸有経緯の根底に於て  
あらゆる  
 終始永劫普遍の心的基礎に有之候へば、国家若しくは民族に  
これありさうら  
 対する愛も、世の道学先生の言ふが如き没理想的消極的理窟的の  
これなく  
 者には無之、実に同一生命の発達に於ける親和協同の血族的因  
 縁に始まり、最後の大調和の理想に対する精進の觀念に終る所の、  
 人間凡通の本然性情に外ならず候。熱情詩人、我がキヨルネルの  
 如きは、この沈雄なる愛国の精神を体现して、其光輝長へとこしなに有情  
 の人を照らすの偉人と被存候。

時は千八百十三年、モスコーの一敗辛くも巴里パリに遁れ歸りたる

大奈翁だいなをうに対し、普帝が自由と光榮の義戦を起すべく、三月十七日、大詔一下して軍を国内に徵するや、我がキヨルネルは即日筆なげうを擲つて旗鼓の間に愛国の歩調を合し候ひき。彼は祖国の使命を以て絶大なる神権の告こくちよく勅を実現するにありとしたり。されば彼に於ては祖国の理想と自由の爲めに、尊嚴なる健闘の人たるは実に其生存の最高の意義、信念なりき。彼乃ち絶叫すなはして曰く、人生に於ける最大の幸福の星は今や我生命の上に輝きたり。あゝ祖国の自由のために努力せむには如何なる犠牲いへと雖ども豈尊あにとしとすべけむや。力は限りなく我胸むねに湧きぬ。さらば起たむ、この力ある身と肉を陣頭の戦渦せんうずに曝さらさむ、可ならずや、と。斯かくの如くして彼は、帝室劇詩人の榮職を捨て、父母を離れ、恋人こいびとに袂別べいべつし

て、血と劍の戦野に奮進しぬ。陣中の生活僅かに十六旬、不幸に  
 して虹の如き二十有三歳を一期いちごに、葉月二十六日曙近きガデブツ  
 シユの戦に敵弾を受けて暝したりと雖いへども、彼の胸中に覚醒した  
 る理想と其健闘の精神とは、今に生ける血となりて独逸民族ドイツの脈  
 管に流れ居候。誰か彼を以て激情のために非運の最期を遂げたる  
 一薄倖いちほくかうじ児と云ふ者あらむや。ゲエテ、シルレル、フユヒテ、モ  
 ムゼン、ワグネル、ビスマルク等を独逸民族の根と葉なりとせば、  
 キヨルネルは疑ひもなく彼等の精根に咲き出でたる、不滅の花に  
 候。鉄騎十万ラインを圧して南下したるの日、理想と光榮の路に  
 国民を導きたる者は、普帝が朱綬しゆじゆの采配さいはいに非ずして、実にそ  
 の身は一兵卒たるに過ぎざりし不滅の花の、無限の力と生命なり

しに候はずや。劍光滿洲の空に閃めくの今、吾人が彼を懐ふ事しかく切なる者、又故なきに非ず候。

日露干戈かんくわを交へて将に三閱月まっさ、世上愛国の呼声は今殆んど其最高潮に達したるべく見え候。吾人は彼等の赤誠に同ずるに於て些いせさの考慮をも要せざる可く候。然れども強盛なる生存の意義の自覚に基かざる感激は、遂に火酒一酔の行動以上に出で難き事と存候。既に神聖なる軍国の議會に、露探問題ろたんを上したるの恥辱を有する同胞は、宜しく物質よろの魔力に溺れむとする内心の状態を省みる可く候。省みて若しも、漸く麻痺せむとする日本精神を以て新たなる理想の栄光裡に復活せしめむとする者あらば、先づ正に我がキヨルネルに学ばざる可べからず候はざるか。愛国の至情は人間の

美はしき本然性情なり。個人絶対主義の大ニイチエも、普仏戦争に際しては奮激禁ぜず、榮譽あるバアゼルの大学講座を捨て、普軍のために一看護卒たるを辞せざりき、あゝ今の時に於て、彼を解する者に非ざれば、又吾人の真情を解せざる可く候。身を軍籍に措かざれば祖国のために尽すの路なきが如き、利子付きにて戻る国債応募額の多寡たくわによつて愛国心の程度が計らるゝ世の中に候。嗟嘆ああ、頓首。

#### 四

四月二十八日午前九時



今日けふは空前くわんぜんの早起せうせい致いたし候まうため、実まことは雨あめでも降ふるかと心配しんぱい仕つかり候まう處ところ、春光はるかな嬉うれ々々として空そらに一点いっけんの雲うん翳えいなき意外いがいの好こう天氣てんきと相あ成せい、  
 明け放あけはなしたる窓まどの晴は心地こころに、壁かべ上うへのベクリンが画ゑ幀ずゐも常つねよりは  
 いと鮮あざやかに見みられ候まう。只ただ今いま三さん時間じかん許ばかり、かねて小生せうせいの持も論ろんたる  
 象さう徴てい芸術げいぎゆつの立た場ばうより現げん代だいの思し想さう、文ぶん芸ぎに對たいする挑てん戰せんの論ろん策さくを編ひま  
 む下くだ心こころにて、批ひ評へい旁かたがた々々、著しやく者しやく嘲ちやく風ふう先せん生せいより送おくられたる「復ふく活かくの  
 曙あけぼの光ひかり」繙ほん讀どく致いた候まう。然しかしこの短たんき便べんりに述のべ尽つし難がた  
 き事ことに候まうへば、今日けふは品しんを代たへて一寸いっしゆん、盛せい中ちゆう校がう友ゆう会かい雜ざ誌しのたために  
 聊いささかか卑ひ見けん申まを進しんむむべく候まう。或あるは之これれ、なつかしき杜と陵らうの母はは校がうの旧きう恩おん  
 に酬むくゆる一端いっぺんかとも被ぞんぜられさふらふ存ぞん候まう。

此こ雜ざ誌しも既すでに第だい六ろく号ごうを刊かん行ぎやうするに至いたり候まう事こと、嬉うれしき事ことに候まうへど、

年齢に伴なふ思想の発達著るしからざるに徴すれば、精神的意義に乏しき武断一偏の校風が今猶勢力を有する結果なるべくと、婆心また多少の嗟嘆なき不能候。嘗て在校時代には小生もこれが編輯の任に当りたる事有之候事とて、読過の際は充分の注意を払ひたる積りに御座候。

論文欄は毎号紙数の大多部を占むると共に、又常に比較的他欄より幼稚なる傾向有之候が、本号も亦其例外に立ち難く見受けられ候。然れども巻頭の中館松生君が私徳論の如きは、其文飛動を欠き精緻を欠くと雖ども、温健の風、着実の見、優に彼の氣取屋党に一頭地を抜く者と被存候。斯くの如き思想の若し一般青年間に流布するあらば、健全なる校風の勃興や疑ふ可からず候。同君

の論旨が質朴謙遜に述べられてある丈、だけ小生も亦其保守的傾向ある所いはゆる謂私徳に対して仰々しく倫理的評価など下すまじく候。

此文を讀みて小生は、論者の実兄にして吾等には先輩なる鈴木卓苗氏を思出だし候ひき。荒川君の史論は、何等事相發展の裡面に哲理的批判を下す文明的史眼の萌芽なきを以て、主觀的なる吾等には興味少なく候へ共、其考証精密なる学者風の態度は、客氣にはやる等輩中の一異色に候。小生は、単に過去の事蹟の記録統計たるに留まらば、歴史てふ興味ある問題も人生に対して毫もかう存在の意義を有せざる者なる事に就きて、深沈なる同君の考慮を煩はしたく存候。吾人の標準とか題したる某君の国家主義論は、推断陋劣ろうれつ、着眼浅薄、由来皮相の国家主義を、弥益皮相いやすに述べ

来りたる所、稚氣紛（ゆるん）として近づく可からず候。筆を進めて其謬見の謬見たる所以（ゆゑん）を精窮するは評家の義務かも知れず候へど、自明の理を管（くだ）々（くだ）しく申上ぐるも兎戯に等しかるべく候に付、差控へ申候。相沢活夫君の論は、此号の論客中尤も文に老練なる者と可（ま）うすべく、申、君の感慨には小生亦私（ひそ）かに同情に堪へざる者に有之候。既にこの気概あり、他日の行動 囑（しよくもく） 目の至りに御座候。（以下次号）

「岩手日報」明治三十七年四月二十八、二十九、三十、五月一日」





# 青空文庫情報

底本：「石川啄木全集 第四卷 評論・感想」筑摩書房

1980（昭和55）年3月10日初版第1刷発行

1982（昭和57）年11月30日初版第3刷発行

初出：「岩手日報」

1904（明治37）年4月28日～5月1日

入力：林 幸雄

校正：noriko saito

2010年5月18日作成

2018年7月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 渋民村より

## 石川啄木

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>